

	長身細形	短身広型	長身広型	鋸歯縁型	穿孔型	合計	磨製石槍	打製石鏃	共伴土器
奥ノ仁田	1					1		3	隆帯文土器
岩本	1					1	4		岩本式土器
ホケノ頭	7					1	3	1	岩本式土器・前平式土器
荒田原	3					3		2	前平式土器
鷹爪野	29					29	1	4	岩本式土器・前平式土器
原口岡	2	2		1		5			前平式土器
小牧3A	1	1				2		5	吉田式土器・加栗山式土器・前平式土器
志風頭	2	16				18		16	前平式土器・加栗山式土器・岩本式土器
建昌城跡	1							多数	前平式土器
西丸尾		1				1			前平式土器
塚ノ越		1	1			2			前平式土器
榎崎B		1				1			前平式土器・石坂式土器
宇治ノ原		1				1			前平式土器
木落		1				1			塞ノ神式土器
牛之原			1			1		1	塞ノ神式土器
石ノ峯		1	1	1		3		1	塞ノ神式土器
三角山I					2	2			塞ノ神式土器

第1表 縄文時代早期の磨製石鏃形態と共伴土器

④穿孔型（三角山タイプ）

穿孔をもつ磨製石鏃で、三角山遺跡では基部近くに穴をもつものと、中央部に比較的小さい穿孔をもつものが出土している。このような穿孔を有するものは、中種子町の須行園遺跡で1点と西之表市古田二本松遺跡採集のものが知られており、現時点までこの形態は全て種子島からの出土となっている。

⑤鋸歯縁型（石ノ峯タイプ）

両側縁は直線状ではなく、研磨によって鋸歯状に仕上げているものである。このような例は石ノ峯遺跡のほか原口岡遺跡で出土しているほか、破損品と思われる鋸歯縁部分で岩本遺跡でも出土している。

なお鋸歯縁型については、石ノ峯遺跡例が小型の三角形を呈し、基部は丸みを持ちふくらむタイプであるのに対し、原口岡遺跡出土のものは先端部のみであるが、形態は長身細型にちかいと推定される。

一方、宮崎県瀬戸口遺跡出土例は、細長い柳葉型を呈している。

このように鋸歯縁型のなかでも形態的に細分が可能であるが、類例の増加を待ちたい。

4 形態と時期

縄文時代早期においても他の時期と同様に、出土土器は単独型式のみの遺跡あるいは文化層はなく、例外なく数型式の土器が同一包含層から出土している。しかし、多種の型式から構成されていても主体となる土器型式が当然あり、今回それをもとにしたのが第1表である。

南九州縄文時代早期前半土器は貝殻文系土器が主体であり、新東晃一による細分と編年案により整理され（新東1988）、最近黒川により集成が行われている（黒川2002）。貝殻文系土器は岩本式から前平式そして加栗山式と変化していくと考えられる²⁾。

先に分類した磨製石鏃の形態と土器型式による時期区分との関係は、時期とともに変化していくことが理解できる。すなわち、長身細型は草創期隆帯文土器の時期に出現している。そして岩本式土器が主体であるホケノ頭遺跡出土例は全て長身細型であり、また前平式土器が主体である志風頭遺跡では短身広型が大部分を占めている。このように長身細型は縄文早期岩本式土器段階まで継続し、前平式土器段階では短身広型に変化する様相が理解される。（第6図）

また縄文時代早期後半期の塞ノ神式土器段階で、新たに